新・下野市風土記 8

能楽と桜

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」『徒然草』第一三七段

（サクラの花は満開の時だけを、月は影のない満月だけを見るものだろうか）現代語訳。

吉田兼好は、観ぬ花、散った花こそいい、満開の花、満月のみを賞揚する人を冷笑しました。この西暦一三三〇年代は、王朝文化の集約であった花見（花宴、観桜）という行事が、内裏から洛中に広がり、鎌倉時代の終わりのころには武家の本拠地である関東にも伝わり、鎌倉武士たちは貴族文化の模倣として連歌と花宴を催しました。しかし、残念ながら田舎風の騒々しい花宴は兼好には嫌われてしまったようで、このように皮肉とも取れる言い回しをされたわけです。

この後、足利義満の時代（一三七八年）には、京都北山に（花の御所）が造営されました。この大造営以来、洛中洛外（京都の町中とその周辺）には、さまざまな里桜の新種が持ちこまれ植樹されました。これらが後の一五九四（文禄三）年と一五九八（慶長三）年の豊臣秀吉による吉野と醍醐の花見につながると考えられています。

義満が能を愛好したため、この御所で多数の演目が演じられ、それまでの散楽が高度な歌劇として「能楽」が完成します。この新興芸能の中心的存在であった世阿弥は、桜を愛好し『風姿花伝』という能楽書を書き残しています。能楽という芸能は足利氏に愛され、新興武士団の新しい教養入門として広がりました。平安時代の王朝文化に見られる古典への理解を歌書、歌学によって直接学ぶのではなく、室町文化は能楽を通じて会得されました。

世阿弥による能楽の確立は、室町幕府体制の中で「桜の美」を生活文化の中に再現させる大きな契機となりました。世阿弥がその劇中で見せたさまざまな桜の幻想が王朝文化と共に一度衰亡しかけた桜文化を甦らせ、摂関貴族に代わる新興の武家貴族によって受け継がれ、改めて都市の花、貴族の花として生活文化に影響を及ぼしました。

桜にまつわる能楽の演目には『泰山府君』、『桜川』、『西行桜』、『忠度』、『墨染桜』『吉野天人』『熊野』『鞍馬天狗』などがあります。また、世阿弥による『花筐』は、古墳時代（六世紀）の継体天皇即位の秘話として花と愛情のドラマを描いています。この継体天皇の伝説と淡墨桜がつながります。あくまでも伝説で史実ではありませんが、岐阜県根尾川の根尾渓谷にある国の天然記念物の巨桜は、継体天皇のお手植え桜との作られた伝説があります。

室町時代以降、美濃国の山深い渓谷の村落にも芸能一座が訪れ、桜に関連する『花筐』のような演目を演じ、その影響が残って伝説が生まれたのかもしれません。

いにしへの　奈良の都の　八重桜
今日九重に　匂いぬるかな

伊勢大輔　『後十五番歌合』（一〇〇九年以前）

参考文献　小川和佑「桜の文学史」

下野市教育委員会　文化課